

母校

頁に少し情報があつたので、2冊の本を紹介し入れようか。  
これについてしよか 結構です。ありがとうございます。

〔特集〕アイヌ民族の権利―サケ捕獲権確認裁判

### 先住民民族アイヌを学ぶ―人の多様性が認められる社会へ―

石川 康宏

一 2004年度、科目「アイヌ語」を開講します

神戸女学院大学（西宮市）は、2024年4月から科目「アイヌ語」（担当・瀧口夕美さん）を開講します。まだ半期だけの実施ですが、同大学にとっては初めてのことで、おそらく関西では他に例がないでしょう。この科目の開講にいたるには次のような前史がありました。

- (1) 2019年12月、講演会「今を生きるアイヌ民族の学びと伝え合い」（総合文化学科主催、講師はアイヌ民族の藤戸ひろ子さん）を実施。
- (2) 2020年度、科目「プロジェクト・先住民

アイヌを学ぶ」を新設するが、コロナ禍のため開講できず（科目「プロジェクト」は座学とフィールドワークの結合を特色とした科目です）。


(3) 2020年度後期の1年生向けグローバルゼミ「越境」（担当教員3名でのリレー科目）の一部で、石川が「アイヌと和人の越境（と交流）」をテーマにかかげ、その1コマに藤戸ひろ子さんをゲスト講師として招く。受講生計75名程度（各25名程度3クラス）。

(4) 2021年度、科目「プロジェクト・先住民アイヌを学ぶ」を初めて開講。コロナ禍のためフィールドワークは実施できず、15コマの座学のみ（うち藤戸ひろ子さんが4コマを担当）。オンラインで、国立アイヌ民族博物館（白老町）や平取町立二風谷アイヌ文

2A3

**先住民 アイヌを学ぶ**

藤戸ひろ子さんに聞いてみた



藤戸ひろ子  
石川康宏  
建石始  
大澤香

平井美津子氏推薦！  
大塚総合高等学校

自然と共生し豊かな暮らしや文化を育んできたアイヌ。一人のアイヌの生活史から、私たちが知ることのなかった人や社会の多様性が見えてくる。

日本機関紙出版センター


化博物館の学芸員の方、アイヌ文化の普及に取り組み平取町出身の学生さんのお話しもうかがう。受講生は10名。

(5) 右の科目をまとめた著作を出版。藤戸ひろ子・石川康宏・建石始・大澤香『先住民アイヌを学ぶ―藤戸ひろ子さんに聞いてみた』（日本機関紙出版センター、2022年8月）。

(6) 2022年度、科目「プロジェクト・先住民アイヌを学ぶ」を開講。座学15コマの上で、初めてフィールドワークを実施。北海道平取町の二風谷、白老町、登別市を訪れ、アイヌのみなさんのお話や各種資

**先住民 アイヌを学ぶII**

北海道に行ってみた



中川 裕  
アイヌの世界観とアイヌ文化の現在

アイヌを学ぶには北海道へ、菅野渡二風谷アイヌ資料館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、国立アイヌ民族博物館、加賀幸恵館のしずく記念館とアイヌの歴史文芸、歴史と文化、遺骨問題、そしてアイヌのアイデンティティを多岐にわたって学ぶ。

日本機関紙出版センター

料館・博物館の展示などを通じて、歴史や文化、口承文芸、アイヌ語などを学ぶ。受講生は12名。

(7) 2023年2月、「『先住民アイヌを学ぶ』特別公開講演会」を実施（総合文化学科主催）。中川裕さん（千葉大学名誉教授）による講演「アイヌの世界観とアイヌ文化の現在」を中心に、映像「ヌカラヤンヌヤン」、藤戸ひろ子さんのオンラインでのお話、学生と中川さんとのQ&Aなど。参加者は130名程度（うち100名以上が学外のみなさん）。

(8) 2022年度の科目「プロジェクト・先住民アイヌを学ぶ」での北海道フィールドワークの内容と、

右の中川さんのお話しを中心に著作を出版。石川康宏・建石始・大澤香共編『先住民族アイヌを学ぶⅡ―北海道に行ってみた』（日本機関紙出版センター、2023年9月）。

(9) 2023年度、科目「プロジェクト・先住民族アイヌを学ぶ」を開講。アイヌの手仕事の体験（藤戸ひろ子さん担当）をふくむ座学のうえ、国立民族学博物館（吹田市）でのお話と展示に学ぶ。受講生は3名以上です。私は2021年度末までは同大学の専任教員として、2022年度からは非常勤講師としてこれらの取り組みにかかわってきました。以下に、その体験を紹介します。

## 二 「アイヌ」を学ぶ科目をつくったのは

私が、アイヌを学ぶ科目をつくろうと同じ総合文化学科教員の建石始さん、大澤香さんに声をかけたのは、2019年6月のことでした。

直接のきっかけは、明治末期の北海道を舞台にアイヌの少女が活躍するマンガ『ゴールデンカムイ』が学生たちのあいだで話題になっており、また、直前の2019年4月に国会で成立したアイヌ新法（「アイヌ

の人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」）がアイヌを「先住民族」と初めて認めはしたものの、本来その承認と一体であるはずの先住権をアイヌにまったく保障しないものになっていると知ったことでした。

あらためて調べてみると、私は2019年4月14日にウポポイ（国立の「民族共生象徴空間」）を「何かの授業で学べないか」と、次のようにツイートしていましたから、この頃にはすでに「アイヌを学ぶ」具体的な方法を探っていたようです。

「来年には白老のアイヌ博物館がリニューアル。何かの授業で学べないか。閉館中のアイヌ民族博物館のサイトは、こちら (<http://ainu-museum.or.jp>)。映像『ポロトコタン最後の一日』は、見応えがある」。

しかし、アイヌ民族に対する私の関心あるいはこだわりは、この瞬間に一挙に形成されたものではなく、もう少し長い時間をかけて次第に醸成されたものでもありました。

私は1957年に北海道の札幌市に生まれ、大学進学にもない京都に移る1975年までをそこで過ごしました。

アイヌにかかわる私の最も古い記憶は、今から60年ほど前のこと、おそらくはまだ小学校にあがる前だったと思うのですが、父親の職場のいわゆる「慰安旅行」についていき、白老町のアイヌ・コタンを訪れた時のものです。コタンの様子はまったく覚えていないのですが、札幌にもどるバスに乗って発車を待っていた時、後からアイヌの民族衣装をまとって乗り込んできた女性の唇の入れ墨（描いたものだったのかも知れませんが）にひどく驚いたというのがその記憶です。

もうひとつは、だいぶ後のことですが「新左翼」の太田竜らが当時静内町（現・新ひだか町）にあったシャクシャイン像の台座を壊したというニュースをテレビで見た時のものです。この事件にかかわった何人かの顔写真の中に、やはり唇に入れ墨をした女性のものがあり、事件そのものの背景や脈絡は理解できないままに、その女性に不思議な思いをもったというのがその内容です。この人は一体どういう人なんだろうというとても素朴で未熟な疑問でした。

いま調べてみると、この事件が起こったのは1972年ですから、私が高校1年生の年でした。その年齢になっても私は「アイヌ」について何の知識ももたず、それを教えてくれる教師や家族など身の回りの大人と

の出会いもまったくなかったということでした。

その後、時間は大きく飛んで、1995年38歳の時に、私は神戸女学院大学の経済学の教員となりました。各地への出張や旅行の度に、旅先の歴史にかかわる本を読むようになり、いま目についた本を開いてみるとたとえば田端宏・桑原真人・船津功・関口明『北海道の歴史』（2009年、山川出版社）を2001年2月に、そして平山裕人『アイヌ史を見つめて』（1996年、北海道出版企画センター）を同じ年の6月に読み終えています。『アイヌ史を見つめて』は、いわば大人になって初めて、アイヌに正面から向き合う学習の機会となったものでした。白老町のかつてのアイヌ・コタンを再び訪れたのもこの頃のことです。唇の入れ墨に驚いた幼い子どもの日から、40年に近い歳月を経てのことでした。

総合文化学科には、人文・社会の様々な専門領域の研究者が集まっており、「耳学問」のレベルにとどまるとはいえ、彼らからいろいろな刺激を得ることができました。本誌にもおそらく何度か登場している上野輝将さん（日本現代史）にすすめられて、網野善彦『日本社会の歴史』（1997年、岩波新書）を読んだのは2003年1月のこととなっています。何冊か網

野さんの本を読むうちに、学校教育の「日本史」は大和政権に端を発する狭い意味での「日本」の特に権力史となっており、現代でいう東日本に限ってみても東北・北海道のアイヌの歴史がすっぽり抜け落ちている。そこでは、この列島に暮らし、独自の文化や歴史をもった人々の存在自体がなかったことにされている。大雑把にいうとそんな「日本史」観についての問題意識をもつようになったのはこの頃だったのでしよう。

同じ2003年6月には、札幌学院大学文学部編『アイヌ文化に学ぶ』（1990年、札幌学院大学）を読んでいます。これは函館市を訪れた際に、同市の北方民族資料館で手に入れたものでした。旅のついでではあっても、アイヌ関係の資料館めぐりも始めていたわけです。

その後、私は大学の担当ゼミで「慰安婦」問題を取り上げるようになり、このテーマについては上野さんとともに沖縄出身の真栄平房昭さん（日本中世史）にも多くを教えることになりました。「学問」の領域でも政治の領域でも、いわゆる歴史修正主義者あるいは靖国史観派の力が非常につよく、それが事実を曲げるにとどまらず、元「慰安婦」被害者の人権を今にいたるまで踏みにじりつづけているという問題です。

書き物の中だけでなく、私とゼミ生に向けられる威嚇や恫喝という形でも、この社会がかかえる課題の大きさを痛感せずにおれません。それはアイヌに対する差別やヘイト・スピーチの暴力性にも共通している問題です。

教室での学びだけでなく、韓国の「ナヌムの家」や水曜集会の現場に学び、他方で、学びの成果を広く市民に発信し、還元する取り組みをゼミ生と行ったのはこの時期のことでした。これらの取り組みの一端は、2016年度の部落問題研究者全国集会・全体会でも報告させてもらいました。

2012年度以降、東日本大震災と原発事故をきっかけに、ゼミのテーマは「原発・エネルギー問題」に転換しましたが、これらの時期にも、「先住民アイヌ」に対する私なりの問題意識は継続していきました。それがいくつかの直接のきっかけをへて、2019年の科目新設につながったわけです。

その時に小さくないエネルギーを発揮できたことの背景には、「定年退職まぢか」という私的な事情もありました。初学者のレベルとはいえ「和人とアイヌ民族の関係史」や、アイヌの人々の権利が踏みにじられている現実をすでに知っていたいながら、何の行動も起こ

さずに退職していくことにある種の後ろめたさを感じたのです。それはゼミのテーマに「慰安婦」問題や原発被災を選んだ時にも、共通して得られた感覚だったかも知れません。

「アイヌを学ぶ」についてゼミで取り上げるのではなく、別に新しい科目をつくったのは、私の退職後にもこれを大学で続けてほしいと考えてのことでした。

### 三 学生と何をどう学んできたか

2021年度から本格化した大学での授業の内容は、先の2冊の本にまとめてきました。2024年度の計画を含めて毎手がさぐりの中でのことですが、何かの参考にしていただけると嬉しいのです。

まず、2021年度の科目「プロジェクト・先住民族アイヌを学ぶ」の構成は次のようなものでした。

- 第1回 ガイダンスと「アイヌ民族超入門」
- 第2・3・8回 「アイヌの歴史」(石川康宏)
- 第4・7・10・11回 「互い違いの歴史」「信仰と唄と踊りと紋様」「手仕事と食文化と交易」「私自身のアイヌー知ってほしいこと」(藤戸ひろ子さん)
- 第5・6回 「アイヌの信仰」(大澤香さん)

トル  
にも共通するもの

第9回 「アイヌの言語」(建石始さん)

第12回 「アイヌの『精神世界』」(国立アイヌ民族博物館・中井貴規さん)

第13回 「英国聖公会宣教師ジョン・バチラーの足あと」(平取町立二風谷アイヌ文化博物館・廣岡絵美さん)

第14回 「AINU」(慶応義塾大学4年生・関根摩耶さん)

以上です。神戸女学院大学にはアイヌ民族の研究を専門にする教員はいません。したがって講義をする私たちこそが、毎回の授業の準備を通じて、また互いの授業に参加しあうことで、学生以上に多くを学んだというのが実情でした。しかし、講義の中軸には、阿寒町シユリコマベツの出身のアイヌで、いまは関西を拠点のひとつにアイヌ文化の普及に取り組む藤戸さんが座ってくれましたから、学生に対する最低限の勤めは果たせたものと思っています。

その後、この年はコロナ禍のため、学生とどこかへ出かける文字通りのフィールドワークは実施できませんでした。そこで、それを少しでも補うことを期待して、第12回以降のような遠方からのゲスト講師にお話しをお願いしたのでした。

その後、

この年の授業は思わぬ「副産物」を生みました。受講生の1人が、ここで初めて顔をあわせた慶応大学の関根さんに声をかけ、「アイヌ×在日コリアン」というオンライン企画を開催したのです。その学生本人が「在日コリアン」でした。私もこっそり参加してみましたが、「誰もが自分を好きになれる社会にしたい」、そういう若い人たちの言葉は、とても頼もしく感じられるものでした。

2022年度の科目「プロジェクト・先住民族アイヌを学ぶ」は、事前学習の座学は2コマで、次のような北海道でのフィールドワークがメインとなりました。9月4日 大阪(伊丹)空港から新千歳空港へ。以下は貸し切りバス・セタブクサ(すずらん)号で移動。萱野茂二風谷アイヌ資料館見学、二風谷コタン散策、周辺のアイヌ民芸店訪問。

9月5日 平取町立二風谷アイヌ文化博物館見学。二風谷コタンのシネチセで木幡サチ子さん(アイヌ口承文芸講師)、貝澤耕一さん(平取アイヌ文化保存会事務局長)、木村二三夫さん(平取アイヌ遺骨を考える会共同代表)、関根健司さん(平取町教育委員会、アイヌ語講師)のお話。昼食はアイヌ料理の弁当。二風谷観光振興組合舞踊部会のみなさんの踊りを見て、いっし

よにウポポ(輪唱)も体験。両日とも二風谷に宿泊。

9月6日 白老町のウポポイに移動。国立アイヌ民族博物館見学。周辺の国立民族共生公園で文化・音楽・食事など体験的な学習。登別市に宿泊。

9月7日 登別市の知里幸恵・銀のしづく記念館を見学。新千歳空港から大阪(伊丹)空港へ。

このフィールドワークから帰ってからの学生たちの感想や意見は、アイヌ語、食べ物、遺骨の盗掘、二風谷ダム建設の問題、資料館の展示、知里幸恵の人生、アイヌのみなさんとの直接のふれあいなど多岐にわたるもので、その中には次のようなものも含まれました。○海外での遺骨収拾は政府がすすんで行なっているのに、盗掘したアイヌの遺骨については謝罪もしない。○同化政策で勝手に日本人にしておきながら、人として同じ権利を認めていないのはとても問題。

○アイヌには和人に虐げられた悲しい歴史があるが、もつと時間の長い誇れる豊かな歴史もある。その全体を多くの人を知ること、自分がアイヌだと言いつらい人も明るく言えるようになるのでは。義務教育に組み入れるべき。

○もともと「日本」のものではなかった北海道がいまは日本になっている。どうしてそうなったのかをカッ

トすると、本当は日本の歴史もわからない。

私は、教育は専門知識や技能を伝えるだけでなく、それらを通じて「人を育てること」だと思っていきますが、まわりの目を気にすることなく、このように堂々と自分の意見を述べる学生の姿を目の当たりにするのはとても嬉しいことです。他方で、これらの声は、学校であれ市民講座のような機会であれ、歴史や社会の教育にたずさわる者の責任の大きさをあらためて指摘するものになっているとも思います。

#### 四 ありのままに多様性が認められる社会へ

最後に、もう少しだけ視野を広げて見ておけば、今の日本は人の多様性に目を向けない、その事実から目をそらし、そうしてますます息苦しい社会に向かっていくように思えます。

アイヌの人々だけでなく、沖縄の人々のこと、ルーツを海外にもつ人、病気や障害をもっている人、原発事故に巻き込まれた人、性的マイノリティなど、社会は明らかに様々な個性をもった人の集まりなのに、「日本はこうだ」「日本人はこうだ」と敢えてそれを一色に塗りつぶそうとする傾向、マイノリティの存在

を無視したり、蔑視したり、排除したりする力が強く  
なっているように思うのです。

それはあらゆる人の尊厳が守られ、その上で人々が自発的に協同する新しい社会への展望をもつことができないう、現代日本社会の知的・思想的な未熟を表わしているのではないのでしょうか。アイヌの歴史や文化を学ぶことは、そうした日本社会のより根本的な問題に気づく大切なきっかけの一つにもなるように思いますし、先の「アイヌ×在日コリアン」の実施に見られるように、学生たちには、そこを掘り下げて考える力が十分あると思っております。

2024年度の科目「プロジェクト・先住民族アイヌを学ぶ」では、若い教員たちと北海道の阿寒を訪れる計画を練り始めています。いまからとても楽しみです。また、科目「アイヌ語」を担当する瀧口さんを中心に、『先住民族アイヌを学ぶ』の3冊目も作成の予定です。

さらにも関連する企画として、2024年2月に神戸女学院大学で、北原モコトウナシさん（北海道大学教授）をお招きしての講演会も準備しているところで  
す。お近くの方は、ぜひお越しください。

（いしかわ やすひろ／神戸女学院大学名誉教授）